

# 毎日新聞多摩総局インターンシップ

# 新聞記者になって就業体験

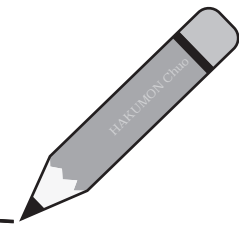
毎日新聞多摩総局(東京・立川市)で、中央大学の池田直さん(法学部3年)と坪倉淳子さん(文学部3年)の2人がインターンシップ(就業体験)として取材活動にあたった。最終日には署名記事(9月9日付・多摩版)を書かせて頂く恩恵に浴した。



学内で写真撮影。左から坪倉さん、池田さん

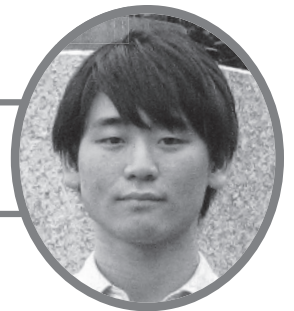


# 署名記事にも感謝



## 新聞をつくる記者の 熱い気持ち

池田 直 (法学部3年)



「新聞離れが進んでいます」。よく耳にする話であるが、自分のことに置き換えてみると確かにその通りだと思う。

家で新聞を取るのをやめたのは私が高校生のころ。そこから数年は新聞を目にしない日がほとんどだった。周りの友達に話を聞いても状況は大して変わらない。

ニュースはインターネットで読む。新聞離れとはまさにこのことだろう。一方で、新聞の情報を正確だと感じている人はいまだに多い。新聞にはそうした信頼を獲得できる秘密があるのだろうか。

秘密を知るためには、記事を書く記者を知らなくてはいけない。記者は何をを考え、何に注目し、どうやって情報源を作り出しているのか。

記者を知ることが、新聞の力を知る近道だろう。そこで見つけたのが、今回参加した記者体験のインターンシップ。就職につながるかもしれないとの邪心もありつつ、新聞の力が知りたくて応募した。

### 記者の一日をそのまま体験

参加したインターンシップはひとことで言ってしまうえば、「記者の一日をそっくりなぞる」。何か特別なイベントを用意してくれるわけではない。手っ取り早く期

間内に仕事内容を教えてくれるようなインターンではない。

新聞社としての時間の一部を切り取って、そこに参加する。でも、私にはそれがとても魅力的だった。記者に近い日常を体験することができる。

記者の一日は、新聞に目を通すところから始まる。記者にもそれぞれ分野があって、自分の担当しているところを中心にパラパラと主要紙をめくっていくのだという。

新聞を読むことは、次の取材にも生きることがある。私もそれになった。一日に複数の新聞を、しかも比べながら読むという体験は初めてだったが、新聞によってこうも取り上げ方が違うものかと改めて驚いた。

記者は次に、取材へ向かう。配属された多摩総局は、決してセンセーショナルな事件がいくつも舞い込んでくるような場所ではない。

市議会の定例議会や裁判、市役所のニュース、多摩にある企業のニュース。これらを中心としながら、多摩で起こる事件・話題を記事にしていく。

経験させていただいたのは、日野市役所に国際交流員としてアメリカから来た外国人職員への取材であった。

事前に取材の準備時間があって、「日本で困ったことは何ですか」、「アメリカとの違いは何ですか」といった質問を考えて臨んだ。しかし、こうした一問一答

の質問は話が弾みにくいことを実感させられた。

同席のベテラン記者さんは、アメリカの話や日野市の話など一見雑談に見える話で場を和ませつつ、核心を聞いていた。あとでベテラン記者さんに聞いてみると、取材前にどういった流れで話を聞いていくかをシミュレーションしていたという。

一連の流れから重要なところを引き出す。こうしたテクニックを使うには、記者は取材対象の関連情報を事前に頭に入れておく必要がある。記者の勤勉さを垣間見た瞬間だった。

## 大切なのは“学び続けること”

記事作成時には記者としての、また別の心構えを感じた。取材時に得た情報量は、書くまでは「これで十分だ」と思えることが多い。しかし書くにあたって総局長に詳細を確認されると、答えられないことばかり。

取材時の情報だけでは完璧でない。こういうとき記者は、再訪問したり電話をかけたりして足りない情報を補完する。

総局長に教えられ、実際に数回電話で詳細を確認した。事実に対して真摯に向き合う心構えがある証拠だ。

最後に、ベテラン記者さんに記者が大切にすべきことは何かを尋ねた。「学び続けることだね」。記者にとって、なにか特定の分野に詳しいことは強みになりうる。

もともと興味があった分野であれ、配属され身近になった分野であれ、大切なのは学び続けること。確かに、例えば刑事事件の裁判では争点となる法律的な知識が、飛行機事故では頻繁に起こるトラブルについての知識が、それぞれ必要である。

ある程度知識を持っていれば、今回の刑事事件の行為は要件を満たすのか、一般的なエンジントラブルなどの相違点はどこにあるのか、といった見方で取材を進められる。こうした強みを、記者は「自ら学び続ける」ことで獲得していくのだ。

今回のインターンシップで、記者の勤勉さ、事実を報道する真摯さ、学び続ける努力—を知ることができた。これらがきっと、新聞記事の信頼性を高める大きな要因なのだ。

これから記事を読むとき、その一行一行に記者の熱い気持ちを感じるだろう。就職という一瞬のためではなく、一生のための学びを得ることができた貴重な体験だった。

# 私たちの記事が 朝刊掲載

坪倉淳子 (文学部3年)



## 作文と記事の違い

インターンシップ初日にさっそく取材へ向かいました。取材相手は、日野市役所に勤務する米国出身のリンネさん。観光PRや行政資料の英訳に従事しているとの情報を元に、ベテランの先輩記者に同行しました。

「日本に来たきっかけは?」「仕事にどんな難しさを感じますか?」

市役所の一室で始まった取材。私も同じインターン生の池田君も緊張して、矢継ぎ早に質問をしてしまいましたが、リンネさんは流暢な日本語でスラスラと落ち着

いて答えてくれました。

彼女は国際交流員という、多摩では新しい職種に就いています。外国人の視点を生かし、日野市の国際化に貢献しているのです。

異国の地で自分の居場所をしっかりとつかんでいるリンネさんがうらやましくなりました。というのも、大学生の私は、生まれ育った国の社会にですら貢献できていない、と感じたからです。

「私も早く仕事ができるようになりたい」。日本でバリバリ仕事をするリンネさんを見て思いました。取材は、新たな出会いの種をまき、自分を刺激してくれるも



のでした。

原稿執筆で気付きました。作文を書くことと記事は書くことは、まったく別のものだ。恥を忍んで言いますが、作文はあまり苦手ではありません。しかし、このインターンシップ中はペンがなかなか進まず、悩みました。

作文は「最近起きた出来事」を題に、自分の目で見たものを書きますが、記事は「リンネさんに最近起きた出来事」を客観視して書かねばなりません。良い記事を書けるかどうかは、相手の立場になれるかだと思いました。

## 総局長のアドバイス

最初に原稿を書いた際、「簡潔な文を書くこと」を意識しすぎたようで、取材で得た情報をかなり省いてしまいました。

原稿を見て頂いた総局長に「まとまりすぎだよ、もっと情報を書きなきゃ」と助言され、ハッとしました。「そうか、インターン生の私の役目は文を要約することではなく、情報を溢れるぐらいに書き入れることだ」と。

池田君と共にリンネさんに電話で再取材し、情報を集め直しました。最初の原稿量は400字程度でしたが、最終稿は約700字まで増えました。総局長はほかに「1の抽象を書くぐらいなら3の具体を書く」とアドバイスしてくださいました。

記事作りは、パズルに似ています。小さな情報のピースをコツコツ集めるのです。堅実さが重要です。絵画のように心のまま筆を滑らせては、誤報につながりかねません。

取材から5日後、記事が朝刊に大きく掲載されたときは、達成感より「間違ったことを書いていないか」と不

安の方が強かったのを覚えています。

## 記者になりたい

私の夢は記者になることです。記事を書くことで社会にある偏見を払いたいと思っています。

原点は6年前、地元・福島県で経験した原発事故。放射能による汚染よりも、偏見、風評の方が私にはショックでした。

劇作家の山崎正和氏の受け売りですが、「活字は漂流する情報社会の礎である」とは、その通りだと思えます。「流言は知者にて止まる」ということわざもあります。デマに流されないために、立ち止まって考えねばなりません。活字メディアである新聞に、その役目があると思えます。

今回のインターンシップでは、日野市役所以外にも裁判員裁判や国立市議会、小池都知事の会見などにも参加させていただきました。歩き回ったため、記者は思った以上に体力が必要と感じました。

一方で、今の社会は体力を求めないようになっていると思います。ネットで簡単に情報発信ができ、言ってしまうとベッドで寝転びながら記事が書けてしまいます。

私は、ベッドの上ではなく、部屋を飛び出し人々の暮らしのなかに入って記事を書いていきたい。

自分に欠けているものを痛感した5日間ですが、これまでの自分を変えていく5日間でもありました。

お世話になった多摩総局、本社、都庁記者クラブ、取材を受け入れてくださった方々には、感謝の気持ちでいっぱいです。

**野島記念  
Business  
Award**

中大生のためのビジネスコンテスト  
中央大学野島記念 Business Award

**決勝大会  
12月10日(日)**

【場所】  
中央大学  
多摩キャンパス  
3号館  
3115教室

お問い合わせは njm.award2017@gmail.com まで。